

《最終講義》

社会学50年と私

— 社会学研究史を柱に —

鈴木 幸 壽



鈴木幸壽教授最終講義（1996年1月11日・明星大学シェークスピアホール）

本日は、わたくしのために最終講義の場をこんななにぎにぎしく催していただきましてたいへんありがとうございます。厚くお礼を申し上げます。特に社会学科の先生方がここまでやっていただくというふうには私は予想もしなかったんですけども、今朝参りましてからたいへん立派な催しをさせていただけるということで、感謝の気持ちで一杯でございます。また、学生諸君は言うに及ばずであります、わたくしの身边で常日頃ご指導をいただいております社会学の専門の諸先生、他大学の先生方にわざわざ

遠いところ、坂をお上りいただいて、来ていただくという光栄に浴しまして、これまた心から厚くお礼を申し上げたいと思っております。「最終講義」というタイトルではございますけれども、まあ、学生諸君もおられますので、あまりアカデミックな話をしてもどうかなとおもうんですが、ときにアカデミック、ときにジャーナリスティックと言いますか、その程度の話でございますので、あまり、耳をそばだてて堅苦しくお聞きにならないでいただきたいというふうをお願いをしておきたいと思っております。まあ、最

後のお話してであると、この程度でご理解をいただければたいへんありがたいとおもいます。また今、堤史朗先生の方から、私に対するいろいろな、なにか、感謝の気持ちも含めてのようでございますけれども、お誉めの言葉をいただきまして、私、ちょっと、穴があつたら入りたいという表現がよくありますが、どうもこの辺あんまり穴が無さそうでありますので、入るわけにも行きませんけれども、ま、そんな気持ちでお聞きいたしておりました。私は、ちょうど東京外国語大学を定年で辞めましてからこちらにお世話になったんですけれども、ちょうど10年目にしようやく、その、大学の民主化の曙光が見え始めまして、まあ、少しはお役に立ったかなあというふうな気がしておりました。図らずも堤先生からそういうお話しをいただきまして、考えてみるとそう、そうかなあというふうな気をあらためてしたわけでありす。

いよいよそのお話しに入るんですが、わたくしが、社会学をなぜ勉強したかということになりますと、ちょっと長くなって申し訳ありませんが、私が、外大を卒業いたしましたのが昭和18年、1943年でしょうか、その9月に卒業、今、9月ということを行いましたけれども、恐らく学生諸君はなんで9月に卒業したのか、その年の3月に卒業できなかったのは、落第して、9月卒業にまわったのかというふうにお考えの方がいるかも知れませんが、ご承知のように16年太平洋戦争が勃発を致しまして、それで、ふつう学生はですね、卒業するまで兵役が免除になるという特典がございましたが、それがペケになりまして、とにかく、はやく卒業させて、はやく軍隊にとろうという魂胆が国家の使命、至上命令としてあったのでありまして、半年繰り上げ卒業ということになったわけでありす。外大は、専門学校でございましたけれども、

4年制の専門学校でございましたから、実質やっぱり3年半で卒業ということになって、今申しましたように昭和18年の9月に卒業することになった訳であります。それで、わたしはドイツ語を勉強したんですけれども、どうもそのドイツ語があまりものにならないと、ものにならないよりはですね、ドイツ語をやって、これを目的とするならば、ドイツ語の先生かなにかになれば一番いいわけでありすけれども、わたしは、語学を目的としないで手段として使おうというふうなことに頭を切り替えまして、それで大学に進学するということを考えた訳であります。その当時、大学に進学すれば、今申しましたように兵役が卒業するまで免除になるということがございましたので、まあ、正直申しましてわたしは、兵隊に行きたくなかった訳であります。その点、一年でも半年でもですね、延びればいいと思って、それで、それがひとつ、進学をするということの積極的な理由であった訳です。ところがですね、その、進学することになりましたら、当時、いわゆる旧制高校の卒業生の方の浪人が非常に増えましてですね、いわゆる専門学校から進学する場合には、大学の推薦、今は大学であります但し、専門学校の校長の推薦がいるというふうなこともございましたし、それからもう一つはですね、その白線浪人というんですが、旧制高校の卒業生が旧帝大に入って行く場合、わたしが志願をしたところにはですね、その白線浪人を一掃することによって、ほとんどかれらは無試験で、東大とか、名古屋大学とか、京都大学、みんなお入りになって、それで、その空きがようやくですね、九州大学と東北大学にしかかった訳であります。それでわたしは、東北出身でございますので、仙台の東北帝大を受けようという気になったんですが、ところがですね、これまた、たいへん不幸なこと、まあ、結果的には幸福だっ

たわけでありましたが、受けようと致しましたら、わたしは法律をやろうとおもった訳ですけども、ところがその法学部はシャットアウトですね、経済学部もシャットアウト、残っているとこは文学部きりなかった訳です。で、文学部と言いますとですね、ご承知のように、英文だ、独文だ、やれ哲学だ、倫理だ、インド哲学だ、ということですね、こういう、学科が並んでおりまして、で、よくよく見ましたら、その一番最後にですね、社会学科というのがあるんですね。「社会学科」じゃなくて「社会学専攻」というのがありまして、どうもこれ以外に受けるところはないということで、もう、やむをえずといえますか、もう万策尽きて、その社会学科を志望して、それで、まあ、どうやら、受かったわけでありまして、それが昭和18年の9月卒業致しまして10月で、帝大に入ったわけでありまして、それで入ったときの話をちょっと致しますと、合格発表をとにかく見に行ったわけですね、そしたら、幸いなことに合格しておりました。ところが社会学の社の字も知らないわけでありまして、これはえらいことになったということで、その発表当日、帰りがけに仙台の本屋へ入りまして、なにか、社会学の本がないかと思っ、ずっと、書棚を見ましたらですね、新明正道先生の、わたしの恩師である新明先生の本がですね、あったわけです。この本をとりあえずですね、買ったわけでありまして、ここに当時の本をもって参りましたが、これは『社会本質論』という本であります。これが、出版されたのがですね、昭和17年に初版が出まして、その年の10月に再版が出ました。この再版のものを、買ったわけでありまして、ここに「東北大受験合格発表の日」とかいうのがこころへに書いてありましてですね、とにかく喜び勇んででもないんですが、これでなんとか勉強せにやならんと思ひまして、止宿先に帰ってから読みはじめたん

ですけれども、いかんせん、難しくて分からないんです。どうしようもない、これはえらいことになったと、思ひましてですね、まあ、しょうがない、じっくり読むに如くはないと思ひまして、これを受験が終わってから郷里に帰りまして、入学式なんてのはあったのかなかったのかは忘れてしまいましたけれども、とにかく、郷里に帰ってボツボツ読んでおったわけですね。ところがですね、12月ですね、昭和18年の12月になりましたら、徴兵延期はまかりならんと、したがって文科系の学生は全部、兵隊にとるぞというおふれが出ましてですね、それで泣く泣くわずか入学して2カ月弱でありますけれども、徴兵検査なるものを受けて、海軍に入ることになってしまったわけですね。そうしますと、入学して2カ月足らずですが、どうやらその講義なるものを聞きに行くチャンスは、もちろんあったわけですけども、わたしが大学へ入って一番びっくりしたことをちょっとお話し申し上げます。外大というのは専門学校でございますので、語学を週に18時間から20時間ぐらいやっていた学校であります、その他にいろいろな科目が多少あったんですけども、例えば簿記であるとか、あるいは珠算であるとか、それからタイプライターの打ち方、タイプライティングですね。こういうものをやらせられて、いわゆる、学問らしい学問というものにはあまりお目にかからなかったわけでありまして、ところがですね、わたしが入って最初の、諸君たちは、ご存知かどうかわかりませんが、『三太郎の日記』という有名な本がございますが、これをお書きになった阿部次郎という、先生がおられました。この阿部次郎先生は、美学の先生であります、この先生の授業にはじめて、おそるおそるでましたところがですね、この先生はもちろん端麗な人でありまして、和服を召しておられまして、それで、ふろしきでですね、これ

絹の立派なふろしきにノートをちゃんと包んでおりまして、それを、ひろげましてね、ノートを出し、それを見ながら講義をされたんですが、ところが開口一番どういうことをおっしゃったかと、わたしがびっくり仰天したっていうのはそこでありまして、それは、どういうことをおっしゃったかといいますとですね、こういうことなんです。「わたしは、諸君に、学問に対する自信を与えようとおもう。」と。実は学問に対する自信を与えてくれる先生というのに初めて、お目にかかったわけでありまして、まあ、田舎出の、語学を多少、かじった者からいたしますと、ど偉い先生がいるもんだなということで、びっくりしたわけです。つまり、学問というものに対してですね、どういう心掛けをしなけりゃいけないかということを、伝授しよう、つまり教えようというんでありますから、その威厳さといいますかね、今の先生の中には、こういう方もおられるかも知れませんが、減多にそういう先生にはお目にかかれないうだろうとおもいます。そんなこんなで、当時あの仙台の大学にはですね、錚々たる先生がたくさんおられました。夏目漱石のお弟子さんであります独文学の小宮豊隆先生であるとか、それから西田哲学と並び称せられる高橋里美教授であるとか、あるいは西洋史に大類伸さんという方がおられましたが、であるとか、それから、法律では中川善之助さんであるとか憲法の清宮先生であるとか、押しも押されもしない教授陣であったわけでありまして、で、法文学部、学部が法文学部でありましたし、旧制大学でありますから、わりとですね、そう、総合大学的な大学で、どういう科目をとってもいいわけでありまして、今の学生諸君のようにですね、必修はこれで、どうのこうのと、120、あるいは140なん単位という事はございせん、18単位をとれば卒業できたというのが旧制大学であったわけです。

そうこうしているうちに、戦争に突入して、我々が引っ張り出されるということで、結局は昭和18年の12月に海軍に入りまして、1年8カ月ばかりおりました。幸い、海外に行きませんでしたので、終戦と同時に戻って参りました。それで復学したのが、昭和20年の10月であります。佐世保から帰りまして、10月には仙台に戻りました。ところが当時ですね、もう、仙台は丸焼けでありましたし、残った校舎も建物がほとんど無くなっておりました。残っておいたのは階段教室と、それから図書館が残っておりました。それから、陸海軍にいておりました学生がどんどん、どんどん、帰ってくるわけですね。もちろん、授業は再開されたわけでありすけれども、物資、あるいは食料の不足というものは、目も当てられない状況でありました。まあ、しかし私は幸いなことに、下宿のおばさんに気に入られたもんで、食料にはあまり苦労しなかったんでありますが、まあ、塩釜という漁港がございしますが、そこまで、バケツを持って、イワシを買いに行きました。イワシを一杯バケツに買いますと、当時、10円でしたかね、10円だったとおもいますが、そんなものを仙石線という電車がございしますが、イワシの入ったバケツをぶら下げて帰って来た記憶もございました。これは生活、なんか食べなくちゃいけないということで買い出しをやったわけでありましたが、肝心の、授業の方はですね、その、なかなかエンジンがかかりませんでしたけれども、新明先生の講義をとにかく聞かなきゃいかんということで、出席をもちろんしたわけでありまして、とにかくこの本を読んだだけでも分かりませんが、先生のお話しになるものは、本に書いてあるようなことを、おっしゃるのはもちろんですが、本の活字になったものと同じことを言葉でおっしゃるもんですから、なかなか分からない。それから、今日は私の後輩の先生方が来ておら

れるのでご存知ですが、とにかくあまり言語明
晰でない方なもんですから、口の中でモゴモゴ、
モゴモゴおっしゃってて、聞き取れないという
ことがございました。ただよく聞いているとで
すね、非常にいい講義であるということが、だ
んだん、だんだん分かってきました。慣れるに
従って分かるようになったんですが、それで、
今申しましたように、卒業の単位っていうのは
18単位でありまして、私が、確か今でもむかし
の、成績簿っていうんですか、成績証明書とい
うのか、これをいただいたのを見ましたところ
がですね、社会学は特殊講義が一つ、それから
演習が二つ、講読が三つ、それから社会学、こ
れはいろいろあったと思うんですが、これが三
つですね、で、九つとったわけです。これで9
単位、それ以外に私は日本経済史とか農業経済
学とか、あるいは、財政学をとってみたい行政
法を聞いてみたい、あるいは憲法を聞いてみた
り、独文の講義を聴いてみたいしたのですが、
独文の授業のときには、先程お話しました小宮
先生と一対一です。授業をやったという記憶
がございます。独文の学生がまだ復員して
帰ってきませんで、私が講義にでましたら、「君
だけかねえ」「君は独文の学生じゃないねえ」
って仰言るので、「そうです。でも、私、多少ド
イツ語が好きなもんですから、教えてください」
ってなことで、小宮先生と一対一で授業をや
ったこともございました。それで、先生の講義
を聴いたのですが、今でもノートは多少残っ
ております。農村社会学なども、そのとき講
義をされておりました。ところがですね、昭和
21年になりましたら、これは歴史的には有名
な話ですが、「公職追放令」というのがGHQ
からでまして、そのうち教職員の追放令が
21年の5月にでまして、私の恩師である新
明先生がですね、ある戦争中の団体の理事
をしてたという関係で追放になってしまっ
たわけでありまして、この追

放というのはGHQの命令でありますので、こ
れはまったなしで教職を追われたわけあり
ます。明星大学社会学科のスタッフは8人お
られますけれども、東北大学は、そのとき
新明先生お一人です。学生数がですね、私
を含めて、終戦後、私が記憶しているだけ
で、私のクラスは確か10名ぐらいでしたか
ら、まあ、一人の先生でも間に合ったとい
えば間に合ったわけでありまして、けれど
も、とにかく、その主のない社会学科にな
ってしまったわけでありまして、ハタと私困
りましてですね、こりやどうしようかな、
ということ考えたんですが、東京から、先
生をお呼びいたしましてですね、それで、そ
の、いわゆる非常勤の先生であります。そ
で社会学の方はどうやら、まあ息をついて
おったというのが、実状でありました。そ
ういう中で、復員学生が、先程も申し上げ
ましたように、どんどん、どんどん帰って
参りまして、大学がパンクしようになって
しまったわけですね。そこで、どういふこと
かよくは分かりませんが、とにかく卒業論
文を書けば卒業させてやると、こういうの
が非公式にありまして、そこで、それじゃ
あ、まあこの際卒業しようかということ
を勝手に考えまして、卒論の執筆に入っ
たわけでありまして、ところがですね、残
念なこと、文献はほとんど無い。つまり新
しい文献はほとんど入って来ないわけあり
ます。これは、当たり前と言えども、当
たり前の話であります。それで結局、図
書館にある古い本を、なんとか、借り出
して、で、その中で、目ぼしいものを
読んで、卒業論文を書くという、そう
いう手立てしかなかったわけでありま
す。そこで私としては、どうするか迷
いに迷ったんですが、結局、テンニエ
スという、まあ、これは学史の時間
で、耳にタコができるぐらいに、学
生諸君に話をしたわけでありま
す。『ゲマインシャフトとゲゼル
シャフト』を書いた有名な

社会学者、このテンニエスのものをやろうと思ったわけです。ただ『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』というのはですね、あまりにポピュラー、「ポピュラー」と言う用語があるんですが、もうかなり研究が進んでおった分野ですので、テンニエスの書物で、*Kritik der öffentlichen Meinung*という、訳せば『輿論の批判』という本であります。これは、1922年に出た本でありますけれども、これを見つけたわけです。そこで、テンニエスについて『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』ではなくて、新しい、その、テンニエスの何かが得られるだろうということで、それを借り出してまいりました。ところがこれ575ページもある厚い本でございます。これはどえらいことになったと。しかし、私は基本的にですね、戦後、世論というもの極めて重要である。言わば、世論については、ほとんど、研究が、日本では、進んでいないと、いうことのでございましたので、まあ、言ってみれば、終戦の年が「世論元年」であるというふうな気持ちで非常に強かったものですから、私なりにですね、デモクラシーの根幹をなすところのパブリック・オピニオンというものについて、テンニエスを手掛りにして、なにか書こうということであつたわけであります。今言いましたように、そのテンニエスの575ページもある本を、これをですね、思い立って、いくら時間がないのに、読みこなせるわけがないんでありますが、まあ、しかし、なんと少しでもこれは書かなきゃいかんということで、ようやく書き上げたものでございまして、これが現物ですね、証拠品に持ってきたんですけども、これは、ちょっと、遠くの方はご覧になって分かりますかね、これ。これがね、ひどい紙でしてね、「卒業論文」って書いてありまして、「輿論におけるテンニエスの学説体系—『輿論批判』を廻る一考察」と言うんですが、これ

は7、80枚ぐらいかな、その程度だと思いますが、これをですね、ようやく、書き上げました。それで、今言いましたように主のいない社会学科でございますので、新明先生のお宅へ行きまして、「これ、書き上げたんですけども、読んでいただけませんか」と言ったら、「それじゃ、あずかっておくから、2、3日たったら取りにいらっしゃい」と言われ、2、3日たつて取りに行きました。そうしたら、いろいろ、このところは文意がはっきりしないとか、その意味がよく分からないとか。これは誰の主張なりや、不明とか。といった具合にね、注釈がみんな付いておりました。ところが、これを直す暇が無いんですよ、もう。締め切りがギリギリでございましたので。それで、まあしょうがない、このまま出すということで、出しました。ところが、それじゃあ、この口述試験は誰がやるのかということになりました。先程言いましたように非常勤の先生は東京から何人か来ておられたんですけども、専任の先生でこの審査をする教授を学部教授会で決めたようでありまして、それが、細谷恒夫という、教育学の教授であつたわけであります。ところが、その教育学の先生がですね、私のこのテンニエスの卒業論文の口述試験をやるというんですから、なんとなく、こう、ちぐはぐでございました。ともかく口述試験に参りましたところが、細谷先生がですね、「いや、私は教育学」しかも、この方はですね、あの教育哲学に非常に造詣の深い方でございましたが、それで、「君にこういう論文についてその口述試験やってもね、よく分からない」と、「だから、ま、君に教わりながら、ひとつ、お聞きしますけれども」って言って、おっしゃったのがですね、『輿論批判』というサブタイトルがついている、書名でもあるわけですが、それでその「クリティーク」、つまり「批判」というのは、これはカントの『純粋理性批

判』という本とか『実践理性批判』という本があるんですが、「その『批判』とどこがどう違うんですか」というのが、第一の質問でございまして、これには私も参りましてですね、「いや、そ、そういうんじゃないんですよ」ってなことでお茶を濁したことも思い出します。新明先生のところへ卒論を持って行った時の話ですがね、「君、これ、出すのはいいけど、就職はしないでしょう」っておっしゃるわけですよ。いきなり就職はしないでしょうって言われたが、私はどういうつもりでそういうことをおっしゃったのかよく分からなかったわけです。しかし心の中ではですね、大学院に進学しようというつもりはあったわけです。なぜかと言いますと、要するに18年の10月に入学してですね、それで22年の3月に卒業をしたわけですが、実質的には1年8カ月しか在学していない勘定ですね。これはまさに未熟児である。未熟児でありますので、未熟のままですね、仮に社会に出てもね、これはとてもじゃないけども、やっていけない。少し、大学院で勉強しようということで、それで不足分をカバーしようという気持ちになってはいました。このことを察知されたのか、新明先生は私が残るとばかり思ってたようであります。それで、またその細谷先生との話しになりますが、口述をやるのに、普通は、まあ、せいぜい一時間ぐらいありやいいんでしょうけれども、「まあ、明日も君来るんでしょうから、明日またやりましょう」と言われましてね、なんと前後三時間、口述試験をやりました。二日間にわたってやったわけです。まあなぜそういうことができたかと言いますと、3月卒業というのは、わたしを含めて、私の友人がもう一人おりまして、二人しか卒業しないんですね。ですから、その口述試験もね、ゆっくりやりましょうというのが細谷先生のどうも魂胆だったらしいんです。まあ、そんなこんなで、

口述試験が終わりして、それで大学院の話になるわけですが、卒業式はもちろんありません。ありませんで、これまた、あの、うかつな話ではありますが、卒業式はない。そこで事務室へ行きまして、「私の卒業証書をください」って言ったら、「あ、君のね」と事務の方が、パラパラと、書類を見ておりましたら、「あれっ。君はね、授業料をまだ納めていない」と。こう言うわけですね。それで、「授業料を納めて来ないとね、渡せない」、というわけですよ。当時ねえ、いくらだったろう？百七、八十円かなあ、授業料は確か、だとおもいますが。それで、「あ、そうですか」ってんで、私もうっかりしておりまして、授業料を納めるのを忘れておったんですね。それで「未納だから」って言われて、早速会計へ行っただけですね、授業料を納めて、で、その書類をもってそれと引き換えに卒業証書をもらってきたという。まあ、話にも何もしらないような、おもしろい話って言えばおもしろい話ですが、ま、当時はすべてそんな調子でありまして、特にどうってことはないんですけども、ま、未納だった授業料を払って、証書をもらってきたという、私に関して言えば、一つのエピソードかも知れません。ともかく、どさくさに紛れて卒業したみたいな形だったもんですから、今申し上げましたように、大学院に行こうということにしました。当時、大学院ってのは、無試験であります。旧制の大学院は無試験であります。ところが、その指導教官、指導の先生がいないんですが、6月5日付でですね、大学の許可を得まして、それで、細谷先生が相変わらず指導教授でありまして、私がいただいたその大学院の入学許可指令という、まあなんか、ぎょうさんらしい、書類なんですが、「社会教育学、頭書の科目研究のため本学大学院の入学を許可する、教授、細谷恒夫の指導を受くべし」というへんな辞令みたいなものをもらいまして、まあ、

ともかく大学院に入れたわけです。ところが大学院に入ってほっとはしたんですけども、本格的な勉強はもちろん「やり直し」と同じでありますので、学部の勉強はろくすっぽやっておりませんでしたから、大学院が本当の勉強の場であるということでした。旧制の大学院は非常に自由であります。拘束はほとんどありません。自分で興味のある研究をやっておればいいというわけでありましたから、まあ、図書館に入館して検索をして借り出すという、特権があったわけです。しかし先程もちよっと言いましたようにですね、新しい図書っていうのがほとんどないわけにありますね。ない。もう、古いのばかりその図書館にあるわけですので、これではしょうがないと。まあ少し古典でも勉強するかということで手始めたのが、ドイツ社会学の成立期に関する文献でして、これを手当たりしだいですね、借りてきてはボツボツ読んでおったのです。

東京の古本屋辺りで本を探しましてですね、新明先生がお作りになった『社会学辞典』、これは昭和19年に出ていますがこれも手に入れました。あるいは高田保馬という先生、あるいは松本潤一郎先生の本、これらはいずれも古本でして、今のように紀伊国屋へ行けば社会学の本がだだっど並んでいるという時代ではございませんので、まあ、とりあえずそれで間に合わせるという以外に方法が無かったわけあります。ところが大学に残った当時ですね、社会学の辞典を作るというので新明先生が発案されまして、昭和25年に『社会学小辞典』が出るんです。これは今ほとんどありません。これは名の知れないいわば幻の社会学小辞典であります、これを作るということになって私と友人、先輩の二・三人の方々と一緒に、これを作ったわけです。そのお手伝いをさせて頂いた。今でも記憶にあるんですけども、これがですね、なんと

辞典ですから「あ」から始まるのですが、「あい」つまり「Love」ですね、「Love」という項目を僕がなぜか当たまして、1ページの「Love」というところを私が書いたわけで、まあ、御覧になると中々立派なものでありますけれども、そんなことが当時あったのでございます。

旧制の大学院に入って、やっておりましたけれども、たまたまですね、私の親友で当時一緒に勉強していた人が、通産省にキャリアで入りまして、この方が、大学院の特別研究生でした。これは詳しく述べると切りがないのですが、戦争中にですね、文部省がよく頑張ったと思うのですが、後継者を養成するために、大学院の特別研究生という制度を作って、これは兵役免除になるわけあります。その制度が戦後も残っておりまして、友人がその特別研究生になっていたのですが、彼がちょうど22年の9月いっぱい辞めまして通産省の方へ行きました。その後が空いたものですから、私が特別研究生になりました。昭和22年の10月1日に発令になりまして学費が頂けたんです。月額900円頂きました。それからその10月1日に給与改定が在りまして、1,600円に跳ね上がったのであります。12月の1日になるとボーナスが出ましてですね、これが3,260円、それから23年になりますと月額学費が2,260円、その同じ日にですね2,700円に跳ね上がっている。どうして私がこんなことを申し上げるかということですね、いかにインフレがひどかったかということの証拠であります。900円がいきなり1,600円になるとか、あるいは2,260円が2,700円に跳ね上がるとかですね。そして最終的にはですね、24年の6月1日に3,400円にまで上がりました。ですから、わずか一年あまりですね。これは、いかに当時インフレがひどかったということを物語っていると思います。まあ、そういうことで学費には心配なかったわけであります。

大変その意味では恵まれておりましたが、社会学の古典の話に移りますと、図書館には古い原書がいっぱいありましたから、ヴィルヘルム・リールという人であるとか、それからドイツ社会学の祖と言われているローレンツ・フォン・シュタインであるとか、あるいは、ローベルト・フォン・モールであるとかシェフレであるとか、グンプロビッツ、この人はオーストリアの学者であります、こういう人の本をですね、やたらと探索といいますか、読んでおったわけであります。要するにドイツ社会学の前史を飾った人々というのが必ずいるわけでありまして、そういう学者の書物に接しておったわけです。これらは新明先生の社会学研究の土台になっているもので、先生自身はあまりそのドイツ社会学の前史についてはお書きになってはおられませんけれども、しかし、その土台になっている人達がどうであったかということを私としては勉強したかったわけであります。新明先生の社会学は、知られておりますようにジンメルの形式社会学から入りまして、文化社会学、そして総合社会学、その間にももちろん歴史社会学が入って来るのでありますが、そういう道筋の入り口のところが私としては気掛かりでありました。それでジンメルのいわゆる「形式社会学」というものについてはですね、確かに個別社会学としての社会学のインディペンデンスイといいますか、独自性は明らかにしたのでありますが、しかし、ジンメルの社会学というものは果たしてその社会学だけでわかるのかと。ジンメルをトータルに捉えた場合、フォーマルソシオロジーとは違ったものが発見できないか、ということがございまして、それでジンメルのものを読み始めました。ジンメルの全集が出ておりましたから、『シヨペンハウエルとニーチェ』ですとか、『哲学の根本問題』であるとか『哲学的な文化』であるとか、『ゲーテ』である

とか、『レンブラント』であるとか、『カントとゲーテ』であるとかですね。それから『生活観』ですね、こういうものは、もちろん、ジンメルの場合は4冊の立派な社会学の本がありますが、それと並んでですね、こういうものをお書きになっているのですから、ジンメルを哲学者という立場で捉えるのと同時にですね、社会学者としてまぜこぜといったら語弊がありますが、そういうことを考えながらですね、なんとしてでも捉えようということで、ぼつぼつと研究したのが、大学院の報告書であります。『ジンメル社会学の再検討』というテーマで報告書を書きました。これはだいたい300枚ぐらいになったと思います。ところがこのジンメルの形式社会学については新明先生とは立場を異にするということになりますので、学会で発表いたしました。そうしたら新明先生が一番前にすわっておられましてですね、盛んに僕に質問するので、私はたじたじ、ちょっとは弟子をカバーしてくれそうなものだと思ったのですが、その時は虫の居所が悪かったのか、こてんぱんに先生にやられましてですね、引き下がったという苦い思い出もあるのですが。それはそれとして、これも先生の弟子に対する思いやりだという風に考えておりました。

まあ、そういうことで昭和24年の9月30日に東北大学大学院の第一期特別研究生としての研究を終了して証書を頂きました。それからもう一つ、この大学院の特別研究生のときにやった仕事としては、特別研究生が10月から始まったということはお話しいたしましたが、研究室におったところが、当時、統計学の先生で米沢という先生がおられまして、その方がふらりと研究室に入って来られまして、「だれが県庁の調査課に手伝いに行く者おらんか」というお話でございました。一緒におった現在山形県立短大の学長をしてる佐々木徹郎君というのが友人であ

りますが、それから広島大学に行かれ、亡くなりましたが、谷田部文吉君という友人と三人で研究室でごろごろしておったのですが、誰も行かないというので、それじゃあ僕が行こうと言って行きました。当時、宮城県知事は千葉三郎という人でありまして、その秘書の方で調査課長を兼務してらっしゃった後藤正夫さんという方、この方はその後内閣統計局長に転出いたしましたし、その後、大分大学の学長をされて、参議院議員を経験され、法務大臣にもなった方ではありますが、この後藤正夫さんが課長をなさっておりました。私は軽くアルバイトのつもりで県庁に行って、ご挨拶をしたところが、「やっ、君ね辞令が出ちゃった」ということになりました。それが23年の3月22日付けでありまして、「宮城県、事務吏員ヲ命ズ、三級ニ敘ス」と麗々しい辞令を頂きました。こうなりますとこれは地方公務員でありまして、なんのことはない地方公務員になっちゃったというか、させられたというか、まさにこれは二足のわらじであります。二足のわらじでメリットがあったのはですね、当時、調査課というのは今でももちろんありますが、指定統計という政府の委任業務がありますが、例えば農業センサスでありますとか、金融関係もそうであります、指定統計を主にやっております、課の課員が当時で80人ほどおりまして、女性がその内8割ぐらいおりました。そこには、課長と課長補佐がおりまして、その下ぐらいに私がすわれということになっておりました。そこで一応、仕事をせにやならんということで、今日持ってまいりましたけれども、私が後にも先にも初めて調査なるものをしたのがこの論文であります。これは『宮城県の農家労働力』というタイトルがついております。これが、昭和23年9月であります。つまり当時ですね、農家労働力が非常に逼迫しておりました、農業経営をどうやったらいい

のかということ農家の人々が困っておったわけですが、そこで22年に農業のセンサスがありまして、その中から少し選び出しまして、世帯数が409世帯、調査人員が3,412名、これについてアンケート調査をやったわけでありまして、調査課でありますから集計とかは手集計でありましたが、計算機も手動式のものでありました。手足があったものですから一応データがそろいましたので、私が労働力と年齢であるとか、あるいは労働力と耕作面積であるとか、畜力、これは馬とか牛を使っておりましたので、その農家労働力と畜力はどうなっているのかということ報告書にまとめました。これが宮城県の県庁にいたときの一つの副産物と言ってはなんですが、私としては初めて調査をやったわけでありまして、こういう風にして県庁に努めておりながら、一応、大学院も終りまして外大に赴任するという事になったわけでありまして。

当時、外大にはどういう先生がおられたかといいますと、樺俊雄先生がおられました。私の母校でありますので、ドイツ語の恩師のところに行きまして、「私は職無しですが、なんとか外大で拾ってくださいませんか」と頼みましたら、「樺先生にお会いになったらどうですか」といわれ、樺先生という名前は前からお聞きしておったものですから、お会いしましたら、「君は新明先生のお弟子さんだから、まあ心配しないでうちにいらっしゃい。」てなことを即座に言って頂きました。ところが着任しましたら樺先生はもちろん社会学の講義を担当しておられたのですが、私には「西洋思想史」の講義をやれとこういうことになったんですね。私ははたと困りましたが、しかし、今更引っ込むわけにはいきませんので、はいわかりましたと言いながら、こっそりと思想史の勉強を急遽始めました。ところが先程から言っておりますようにほとんど本がないんですね。しかし、よくよく調べてみ

ますと、当時、『社会史的思想史』なんて本も出ておりましたし、それから新明先生や樺先生や早瀬利雄、大道安次郎先生らが1950年に出しました『社会思想史事典』というのもありまして、これが大変私にはストックをするのに役に立ちました。講義ノートを作るのに苦労しましたけれども、学生も、当時の学生として興味を持ってくれました。原書講読ではマンハイム、マックス・ウェーバーのものを選んで読んでおりましたけれども、まあこれは主としてドイツ語の学生でした。ただ私が一番困ったのは、図書館に行きましたら、社会学の洋書がわずか30冊しか無かったことであります。これには私はたと困りました。これではどうしようもないと思って頭を抱えておったのですが、ところがあの禁帯出つまり帯出できない本が置いてあるところを覗いてみましたらですね、なんとそこにですねドイツの有名なフィアカントという社会学者が編纂し、1931年に出た膨大な『社会学辞典』があるんですね。これには私はびっくりいたしました。つまり外大というところはディクショナリーと名のつくものはやたらに買ったんですね。買ったものですから置いてあるわけですよ。それでこれをみつけましたので、これは自分の専用だといわんばかりにですね、研究室に持ってって返さなかったんです。それから、国家学の辞典もありました。こういうことで、これが唯一助かったものですが、しかし、いかんせん本が足りない、本は入ってこない。とくにドイツの本なんかは全然入ってこないわけがあります。ですからそこで、相変わらず古典をですね研究しなくちゃいかなということになりました。しかし、どこへ行く当てもありませんから、当時、東大に行きまして、そしてこういう本はありますか、こういう雑誌ありませんかと、東大の図書館や研究室には膨大な本が置いてあるんですが、そこへいってお借りをした。

その時に大塩俊介さんが確か助手をされていたと思うのですが、これを機会にして東大の方々とも親交を持つようになりました。

それから新明先生が追放中なので、東北の社会学というのは、いわば、主が不在になったも同然ですが、新明先生の学風というが大袈裟ですが、学風を守らなければいけないということで、『社会学研究』という雑誌を発刊することになりました。その第1号が1950年の7月に出版して、そこに「関係学の一考察」という論文を寄せたのであります。これはレオポルト・ヴィーゼという人の研究であったわけでありまして、まあその後『社会学研究』には3号でしたか、「社会意識と個人意識」、これはデュルケム研究であります但書きました。それから、当時特記すべきことでは、東京社会科学研究所というのがあり、これは私調べたところが、昭和8年に出来たものでありまして、当時、錚々たる方々がメンバーであったわけですね。分科会として社会学研究会、社会史研究会、ファシズム研究会、社会科学原理論、経済学研究会、現代社会論など、メンバーとしては尾高邦雄先生、清水幾太郎先生、安西文夫先生、この方はこの大学で教鞭をとられた方ですが、戸田武雄さん、馬場啓之助さん、まあいずれも当時錚々たる若手、若手といったら失礼かもしれませんが、こういう方々がしょっちゅう集まっては研究会をなさっていたようであります。これはもちろん戦争中に無くなりまして、それを再建しようということで樺先生、早瀬先生、阿閉吉男先生、加茂儀一先生、そういう人々が復活なさいました。これは同文館という出版社がありまして、そこで毎月研究会がありました。たまたま私はその幹事を仰せつかりまして、中央大学をお辞めになった佐藤智雄先生、あるいはここにおられました鈴木二郎先生なんかと一緒に、私が一番下で幹事役をやっておりました。ここでも随分啓発さ

れるところが多かったわけであります。そうこうしているうちにですね、外大で紀要を出そうという話になりまして、1951年ですが、そこに「ドイツ社会学の現代的課題」というのを書きました。これは新しいものはまったく入っていません。私は復習のつもりでドイツ社会学の歴史をざっと書きました。ところがご承知のようにですね、当時アメリカ社会学がどんどん入って来ていまして日本の社会学者というのはこぞってと言っていいほど、アメリカに目を向けていたのであります。これは当たり前と言えは当たり前のお話であります。例えばマートンのもの、ホムズのもの、あるいはリースマンのもの、パーソンズのもの、こういうアメリカ社会学者のものがどんどん入ってきました。これらはいずれも1950年代ですね、45年以降から50年代にかけて、こういうものが入ってきたのであります。一方、ドイツ社会学というものについてはまったく関心がありませんので、私もこの辺でドイツ社会学を切り上げてですね、アメリカ社会学の研究に転向しようかな…と思ったほどですが、どうもそういうわけにはいきませんで、ドイツ社会学一本槍でいこうと決心いたしました。ただ、このころですね、大衆社会論というものがアメリカから入ってまいりました。アメリカから入ってまいりました段階で、リースマンの*The Lonely Crowd*という本も入ってきました、これは1950年に出版された本であります、どういう経緯か聴いていないのですけれども、佐々木徹郎君という先程話した友人が翻訳をしようとする事で、みすず書房からこれを出すことになったから君も手伝えということになって、私と谷田部君と佐々木君と3人で*The Lonely Crowd*を訳したわけであります。で今は、加藤秀俊さんという方の訳したものが販売されておりますが、本邦初訳というのは私たちがやったものでありまして、新版が出て加藤氏が版權を

取ってしまったわけで、われわれのものは^べけになってしまったという経緯があります。これは確か6年間ぐらい出たはずであります。まあこういうことがありまして、当時マンハイムの*Man and Society*、あるいは今言った*The Lonely Crowd*であるとか、エミール・レーデラーという人がおりますが、この人の*State of the Masses*であるとか、コーンハウザーの*Politics of Mass Society*とか、これはいずれも翻訳がありますが、こういうものが続々と出まして、アメリカ社会の中間層肥大に伴う社会心理学上の研究であったものが、日本の大衆社会論に火を付けたわけであります。もちろん、戦後の労働組合結成が進む中で、知っての通り27年には血のメーデー事件が起こったりですね、あるいは石川県の内灘の問題であるとか、こういう状況が日本の場合にありまして、労働組合のもつ民主主義化におけるパワーというものをどういう風に捉えたらいいかということと、わたしが、圧力集団としての大衆というものを、これはほんの研究紀要レベルでは社会評論的でありますけれども、ちょっとした問題提起をしたわけであります。でそれに輪をかけたわけではないのですが、当時、ガイガーという人がおりまして、この方はドイツのブラウンシュバイク工科大学教授だったんですが、この人の名前はもちろん昔から知っておりまして、この方の本を翻訳しないかという話が出てまいりました。そこで私はどのように翻訳するかな…と思いましたら、出版社が知識人論のいい本があるが翻訳しないかという話になりました。ガイガーという人は多方面の人ですが、『大衆とその行動』という、これは1926年に出版された有名本ですが、私が一番読んだと言えば読んだ方ですが、*Gestalten der Gesellung*という本があります。それから先程言ったフィーアカントの辞書のなかに社会学という項目をきちんと書いている人でありま

す。この人の『社会におけるインテリゲンチヤの課題と立場』（邦題『知識階級』）という本の翻訳であります。1949年に出た本です。これをどうやらこうやらで翻訳をいたしまして、1953年に出版しました。このガイガーにつきましては、ガイガーにとりつかれたというわけでもないんですが、その後 *Klassengesellschaft in Schmelztiegel* という本がありまして、これも57年の10月に『新しい階級社会』というタイトルで訳をいたしました。これらはマルキシズムの階級論に対する批判の書でありましたけれども、ガイガーという人はナチスに追われまして、デンマークに行き、そこも追われてスウェーデンに亡命しました。戦後またデンマークにお戻りになったんですが、アメリカに行く途中の船の中で病死されております。翻訳について若干申し上げますと、私はこの翻訳をすることになって、ガイガー先生に手紙を出しました。版權をくださいと言ったらですね、それは出版社と出版社がやることだから私は関知しないけれども、私が今紹介した『社会におけるインテリゲンチヤの課題と立場』という本は、もともとデンマーク語で書いたものが最初のものである。「デンマークでは著者が翻訳権を持っているからデンマーク語から翻訳したことにすればいいじゃないか」という返事が参りました。非合法的手段をガイガー先生はわざわざ教えて下さったんですね。まあ当時、出版社といっても有力な出版社がそう多くあったわけではありませんし、中小の出版社であったものですから、版權がただならそれに越したことはないということと、私がその手を使うことにしてガイガーさんにまた手紙を出しました。そうしたら返事が来ないのでおかしいなあと思ってたら、カナダのトロントへ行く途中で心臓麻痺でお亡くなりになったということを後で知りました。したがって私の翻訳書にはデンマーク語から訳して

ドイツ語版を参考にしたという変な断り書きが書いてあります。これはおおっぴらには言えない事であります。私がデンマーク語を知っているはずがありませんから。そういうこともございました。

それから57年になりましてから、中央の佐藤智雄先生と一緒にKönigの『現代の社会学』（*Soziologie heute*）という翻訳本を出しました。そんなこんなやっておりますうちにですね、さっき言いました大衆社会論ブームになりました。これは松下圭一という政治学者が火付け役でした。しかし、私はアメリカと同じ大衆社会論を展開するには日本は全然違うと。確かに1956年ですか、経済白書で「戦後は終わった」ということを麗々しく書き立てたわけですが、しかしながら果たしてその民主化、大衆化、組織化ということが日本の場合、アメリカと同一には論じられないという気持ちを持っておりました。たまたま東大出版会の「講座社会学」に書いてほしいと言われまして、それで「大衆化と大衆社会」「大社会と集団」「現代社会学の潮流」これは学史であります、こういうものに立て続けに書いたわけであります。確かにマスメクラシーという状況が日本の政治状況のなかでどこまで実るものかについて私は色々期待をしておったわけであります。戦後政治が大衆デモクラシーというものに対してどういう対応の仕方が望ましかったかという日本の政治状況、これをマスという側面から捉える方法を視野に入れようとしておったわけであります。そのころから私は政治社会学のほうに目を向けようとしたのであります。その理由は早稲田の教授をして途中辞めましたが、大山郁夫さんという有名な政治学者がおられました。その方がですね『政治の社会的基礎』という本をお書きになったわけです。これは大山郁夫全集がこれまでに2回出ておりますけれども、その古い方で

私は拝見いたしました。これが私が政治社会学について、触手を動かされた一つの大きな要因であります。そのなかです、大山さんは「政治学は社会学の一つの分野である」と、こう書いているんですね。社会学が親で政治学がその分派であると、そういうことを主張されているので、私はびっくりしたのですけれども、政治学を社会学のひとつの分科とみる理由はなにかということが大山先生の所説に詳しく出ていました。これはなんのことはない、よく考えてみますと、イエリネック (G.Jellinek) という国家学の先生でありますが、この方が二面説のなかで政治学を社会学の一部とみなすようなニュアンスで述べているところがあります。それに触発されたということがひとつあります。それからイーストン (D.Easton) という人がおりました、この人は *Political System* という本を書きました。あるいはその *Framework for Political Analysis* という本も書いておりますが、これは言うまでもなく行動主義の政治学であります、これはもちろんパーソンズとも関係がありまして、そういうものに触発されまして、政治権力論というものに興味をもつようになりました。1975年には「地方政治と住民」というのを、これは私が二ヶ所ばかり調査をいたしましてまとめたのですが、ただ今でも思っていることですが、国政レベルにおける政治の実態については社会学者が寄ってたかって研究しても限界があると。なぜかと言いますと、これはどこでどういう風に物事が決まるかという、政策の意思決定です、これが必ずしもはっきり出てこないんですね。ですから、中央レベルでの政治というものの研究は私あきらめまして、日本の地方政治のなかで、どういう風なかたちで政策が決定されるかと、それはあきらかに、地方の権力構造と関わってきますので、私は地方の権力構造というものに関心をもちまして、調査も二

回ほどしたわけであります。このように、ひとつは政治社会的なものに移行すると同時に、やはり相変わらずドイツ社会学から離れられないものですから、色々ドイツ社会学についても今まで何本か書きました。また、私はドイツ社会学研究会というものを1981年に発足させました。もちろんアメリカ社会学研究会などというものはありませんけれども、フランス社会学については学会があるぐらいでありまして、今日お見えになっている創価大学の佐々木交賢先生がその会長をなされておりますが、私はドイツ社会学研究会という非常に地味な研究会を発足いたしました。ただこれは自慢じゃないんですが、現在活躍中のそうそうたるドイツの社会学者、例えば世界的に有名なニコラス・ルーマン (Niklas Luhmann) さんであるとか、あるいはマッテス (Mathes) さんであるとかシュルフター (Schluffer) さんであるとか、あるいはヨハネス・バイス (Jahanes Weiß) さんであるとか、こういう人々を実はお呼びいたしまして、1991年ですが、日独社会学者会議というものを3日間に亘って催したことがあります。これは確かにわれわれにとって、「ドイツ社会学とマックス・ウェーバー」というメインテーマでやりまして、マッテスさんとマングロスさんという人とテンブルクさん、この方は亡くなりましたけれども、この会議は大変好評でした。私がドイツ社会学研究会というものを主催するなかで、ドイツ社会学についてのいわば存在、社会学のもっている意味あいをはっきりさせようということを主としてやってきたということになります。

そろそろ時間が終りでありますけれども、あと一言だけ申し上げまして終りにさせて頂きたいと思うんです。それは、私がこれまで社会学をやってまいりまして、みなさんもおそらくこういうことが聞きたいということがおありだと

と思いますが、それは「なんのためにあなたは社会学をやったんですか、」と。あるいは「なぜあなたは社会学をやったんですか」と。こういうことになると、これに対して私は私なりにお答えしなければいけないと思います。私自身が社会学の研究をしてきたのは、ひとつはですね、やはり大学院の特別研究生のときにやりましたジンメルがどうも頭からこびりついて離れないんです。1917年に出た最後のジンメルの社会学の本に、『社会学の根本問題』という本があります。このサブタイトルを見ますと、「個人と社会」ということになってるんですね。これがひとつ。それから清水幾太郎さん、清水幾太郎先生はですね、新明先生追放のときに東京からわざわざ来られまして、東北大学で連続講義をされました。そのとき私は先生から頂いたんですが、『社会と個人』というタイトルの本でありまして、このサブタイトルは社会学成立史となっています。昭和10年に出た本であります、再版が出たものを頂いたんですが、上巻しか出てないんですね。それで私が注目したいのは、ここで清水幾太郎さんは、大変スマートな方です。ジンメル、あんな難しいしこ面倒くさいものは駄目だよ、てなことを口でおっしゃってるんですけども、しかし、その実ですね、やはりジンメルに引かれるものがあつたようでありす。『断想』という本が、これは断片集でありますけれども、清水幾太郎さんが翻訳なされております。『社会と個人』というタイトルで先生がお書きになったこの本は、ジンメルと違って今度は逆ですけども、ジンメルが「個人と社会」というサブタイトルにしたことと、どうもどこかでつながる、ということではないか。私は現代社会をみる場合に、最近「サラリーマンよ、あなた方は企業戦士として働くのは愚の骨頂ですよ、」みたいなことがムードとして、まあムードの段階ですが出てきた。自分の

プライベートの生活をきちんとやりなさいということをしきりと言うようになって来ました。これは「組織のなかの人間」というような表現もあるんですけども、「社会と個人」と言った場合に社会が非常に漠然としているとすれば、これは組織と人間といってもいいんです。組織と人間という言葉に限定すればですね、われわれはひとつの組織のなかで、とにかく日常生活を送っていますし、送らざるを得ないのですけれども、そこで両者の関係をどこでどのように接合してですね、一方、個人としての生活、あるいは主体性と言ってもいいのですが、それを確立出来るのか。自分が今一体どこにいるのか。そういうことがはっきり読みとれる、それを身につけるということが出来なければですね、これはやっぱり社会のなかで、あるいは組織のなかで生きていけないと思うんですね。しかし、かと言ってですね、それだけで突っ走るとですね、これは必ずコンフリクトを起こすわけでありすから、そういうその言ってみればですね、アリストテレスがよく使った言葉でご存じだと思いますが、「アポリア」という言葉がありますが、これは解決し難い事柄で同一の問いに対して合理的な答えがふたつ出てくると。しかもそれは合理的意見であるという以上、これはアポリアでありまして永遠の解き難い、これは数学では解けない問題というのがあるそうではありますが、数学はやっているうちに解けるかもしれませんが、これだけはですね、個人と社会の問題だけはそう簡単に右から左に解けるという代物ではないだろうという風に考えています。それを私は私なりにですね、そういう個人と社会の問題というものを根底に置きながらですね、自分がなにをすべきであるかということを考える。あるいは、世の人のためにですね、こうしてほしいああしてほしいということと言わず語らずのなかに申し上げたい、知ってもらいたい

ということがあったわけであります。これが第一の理由であります。

それから第二の理由はですね、これは日本は知ってのとうりにですね、あらゆる学問が輸入科学であります。社会学の場合もその例に漏れないわけでありまして、そうなりますと、日本の社会学者という方々は明治・大正・昭和あるいは平成、ずっとおそらくジェネレーションでいきますと、今は第四世代から第五世代になっているのではなかろうかと思っているのですが、いずれにしてもですね、明治期なんかとくにそうでありまして、大正期もほぼそうであります。ほとんどがですね輸入科学であります。わずか明治から百数十年しか経っていない、これだけ発展を見たわけでありますけれども、社会学がこの間にですね、どれだけのものを蓄積として残したかと言いますと、私はですね、これが輸入科学でありましたためにとくに第二世代・第三世代、これは第三世代と言いますとかなり積極的におやりになっているんですけども、少なくとも第二世代ぐらいまでの方々というのは輸入これ努めて紹介する。そして紹介してですね、例えば『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』はこういう本ですよ、ゲマインシャフトとはこういうものですよ、ゲゼルシャフトはこういうものですよと、言わば定説化されたものがそのままずっと生き残っているわけがあります。それに対してですね、果たして本当にそうなのかと。つまり、私は必ずしも大先輩のお残しになったことについてとやかく言う資格もないんですけども、なにか定説化されたもので、われわれが飯を食ってるということについて疑問があるわけであります。例えばジンメルの場合、形式社会学という風なことを、それでジンメルの書物、『社会的分化論』『社会学』『社会学の根本問題』、この3冊しか目につかなかったわけであります。ところが最近になってから、

ジンメルの『貨幣の哲学』というものが社会学にとって非常に重要であるということがわかってきたわけです。それからパーソンズの場合もそうでありまして、Social Systemまあこれだけに限って言う問題がありますけれども、それだけでパーソンズを卒業できるかというところではない。やっぱりパーソンズについてですね色々な角度から、つまりアメリカ資本主義というものをパーソンズはどういう風にみてですね、どういう風に温存しようとしたか。私に言わせれば、パーソンズのSocial Systemというのは、やっぱり、アメリカの資本主義を維持していくために必要な理論的武器としてこれを掲げた。彼がどこまで意図的にやったかはわかりません。わかりませんがそういう視点もまた大事ではなかろうかという風な気持ちもしてなりません。したがってですね、私はよく言うのでありますが、第一世代・第二世代、あるいは場合によっては第三世代の方々がおやりになったことをもう一度、総点検をしてですね。あるいはドイツ社会学ならドイツ社会学についてですね、こういう歴史だという、通り一辺のものではなくて、本当にそうなんだろうかということを、落ち穂拾いの的にやるのが現在の日本の社会学にとって非常に重要であるという風に考えております。しかし私はそういうことを考えながら、どうすればいいかということになると、古典をですね、克明にこれから読み直していくということをやらなければいけないんですけども。これには相当な時間とですね、労力を必要とするわけでありまして、私一人にはとても荷が重すぎてどうしようもないということになります。

そんなことを常日頃考えながらですね、明星大学に来て、ちょうどここは社会学科がございまして、外大は社会学科がございせん。私の社会学で卒業論文で卒業した方が約200名ぐら

いおりますけれども、そういう方々がおられたんだけれども、社会学科のある大学で教鞭をとるということはここが初めてであり、また最後であろうと思います。そういうことで皆さんに囲まれながらですね、私は私なりにここでの10年をやってきました。10年で区切りがいいのですが、そういうことでお別れをするということになったわけです。私、心残りをしてるんですが、学生諸君に対して大変申し訳ないことをしたと。しかし、私個人の存ではどうすることも出来ないことでございますので、その辺はお許しを頂いて。まだ幸い、体は丈夫でありますので、しこしこと、またドイツ社会学の古い本でも読んでいこうという風な気持ちであります。けっして私は余生とは考えておりませんので、これからが本番であると、今まではその助走でありまして、これからが本番であると

いう気持ちでありますので、ひとつ学生諸君も含めて、先輩、同輩、後輩の皆さんから、是非、叱咤激励をしていただきたいと思います。私の恩師の新明先生が中央大学をお辞めになるときにちょうど50年の最終講義をされたわけですが、恩師にあやかって、私はちょうど50年ではありませんで49年と数か月ですが、四捨五入して50年ということでお許しを願ったわけがあります。大変早口で話をいたしましたけれども、私の意のあるところをお汲み取り頂きまして今後もひとつよろしく願いいたしたく思っている次第でございます。本当に今日は長時間ですね、お話を聞いて頂きましてありがとうございました。これで私の話を終わらせて頂きます。本当にありがとうございました。

(すずき ゆきとし、本学科教授)